

- ① Airi KOGURE 『答え合わせは過去の中』
- ② Rina SUGA 『The safety valves of the heart』
- ③ Risa OGAWA 『本』
- ④ Mayu IWAOK 『無題』
- ⑤ Konomi ONISHI 『You never know』
- ⑥ Takumi TSUKAHARA 『無題』
- ⑦ Alexandre MORRIS 『Smells like child spirit』
- ⑧ Samuel BLAZY 『Masks』
- ⑨ Tsubasa KOKUMAI 『Olfactory map and records of the workshop』
- ⑩ Correction of every artist's works
- ⑪ Hila YAMADA / Takumi MASUI 『River』 ※展示は7/1-7/3のみとなります。
- ⑫ Marina ICHI 『There it is』
- ⑬ Ninon GOUTELLE 『French kiss』
- ⑭ Boris RAUX 『The rulers』

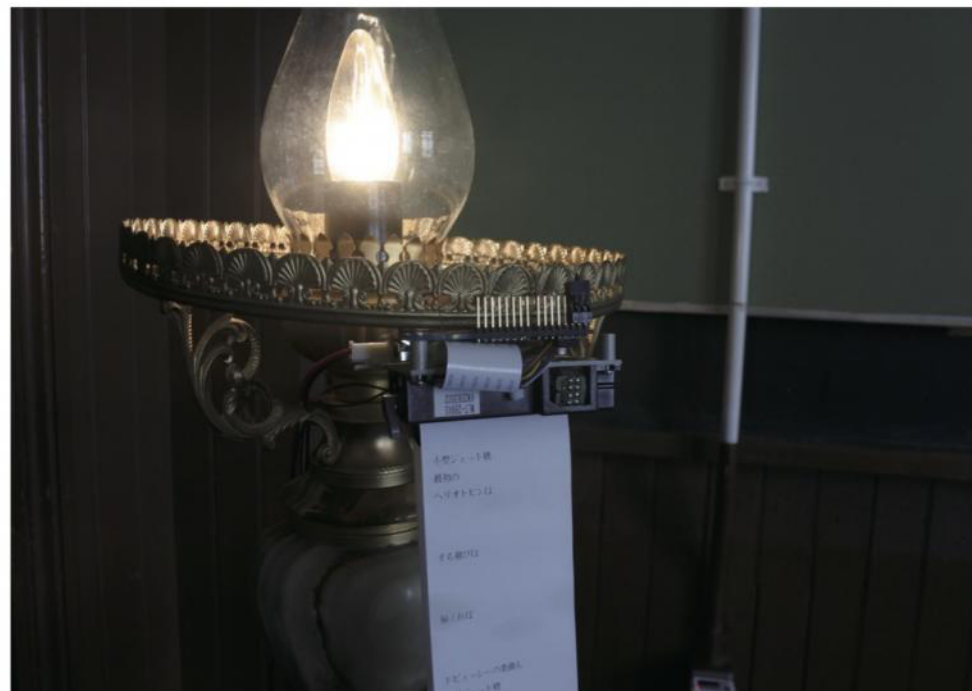
主催：Perfume Art Project

共催：京都芸術センター























## 答え合わせは過去の中

木暮 愛李 (芸術学部 デザイン学科 メディアデザイン系)



石鹸の香りから何を思い出すか。そう問うてみることからこの作品は始まる。持ち帰り可能な紙石鹸をヒントに、鑑賞者はその答えを黒板に書き残して去っていく。というのが大まかな流れである。

まず問題になったことは展示場所である。フランス人側は小学校という場所の持つ力を最大限考慮した上での作品制作を想定していたようだった。したがって、当初の私の作品案については場所のことを考慮していないという指摘をうけた。黒板全面を使おうとするならば、それを覆ってしまうのはもったいないではないか。という彼らの指摘はもっともなものであり、展示場所の持つ力を考慮したうえで作品制作とはどういうことかを学んだ。実際の展示において、鑑賞者の反応やチョークを持って黒板に何かを書くという行為の中に懐かしさが見え隠れした時、ホワイトキューブでは決してできない展示が実現したという印象をうけた。香りについては、トイレの芳香剤といった非常に即物的な答えで埋まっていこうという、私自身の冷めた予想とは裏腹に、思いの外バリエーションに富んだ回答が得られたことは幸いだった。さらに意外だったのは、具体的な状況や場所の記憶というよりは人物に関連するものが多かったことだ。それは おばあちゃんのイメージであったり、昔隣に住んでいた憧れのお姉さんの香りの記憶だった。特におばあちゃんと回答した鑑賞者の数は群を抜いて多かった。童謡の歌詞にあるような、お母さんと石鹸の香りがイコールであった時代の終わりを目の当たりにした気分である。

また、石鹸の香りがその人の記憶に刻まれるためには、非常に個人的で、ある種の親密さがある状況でなければならないという条件が見えてきた。文化的習慣による多少の差異はあれども、いわゆる現代的な生活を営む中で、石鹸を使うという行為は人類共通の習慣的な行動だ。人の脳は絶えず情報の取捨選択をしているので、特に注視するような必要性を感じない物事に関する情報は BGM 的に処理される。自分の部屋の匂いが自分でわからないように、"ある"のに"ない"状態だ。今回の作品においても同様の処理が働いたのか「わからない」という回答も散見された。

"ある"のに"ない" "いる"のに"いない"これらは自らの聴覚過敏が発覚して以来の制作テーマでもある。音と匂いという違いはあるが、入ってくる情報の取捨選択ができない、本来なら無かったことにされて流されるものへ注意が向くといった部分は共通している。そういった意味で香りのアートは感覚過敏を擬似体験する場としても機能しているのではないだろうか。

## 薬

小川 理沙 (短期大学部 美術学科 美術分野 現代アート 2016年度卒業生)

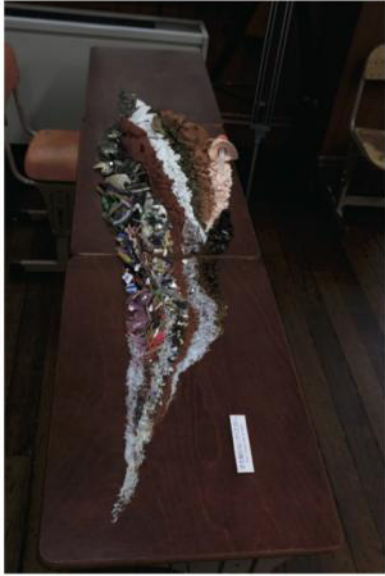


制作は、自らの人生で最も固執した"本"に対し無数の錠剤を貼り付けるという、ある意味侮辱的とも取れる作業から始まった。「お気に入り」を超えて、長年私の「ライナスの毛布」になっていたそれは、共に過ごすうちに独特の芳香を持ち、その内文字を必要としなくなった。聞くだけで私のイデオロギーを形成し、支配し、私は安心してその世界に飛び立つようになった。いつの間にか"本"は香りを備えた事で"薬"になったのだ。薬にまみれさせた今回の作品は、侮辱ではなく究極の本の空間を作ったのだ。

実際の展示では想定外の出来事と、それに伴う発見があった。鑑賞者は誰もが耐え難い異様な薬の匂いに顔をしかめた。香りを付けずとも臭ってくるその薬に興味を持った。若い女性は「胃薬の匂い」がすると言ひ、片や老年の夫婦は「昔の書棚の蒸れた匂い」がすると言った。そしてそのほとんどが、「この本は何なんだ!？」と本の内容を垣間見ようと鼻をつまんで顔を近づけた。「この臭気を放つ本」に興味を抱いていた。誰もがその薬の匂いから内容を想像していた。"本"は文字を主体とする文章の連なりであり、香りは後天的な産物である筈が、今回の展示では逆転していた。薬の匂いを嗅いだ後に読む、私の「ライナスの毛布」はとてつもない内容に思えるに違いない。嗅覚という強烈な情報は、本の内容を左右するまでだったのだ。自分の制作とは全く逆転的な結果にとても驚いた。嗅覚は印象として人の脳に巣食ひ、空間を作り上げるものだった。作品には自分の思いを背負わせ送り出したが、全く違う結果を展示場で勝手に生み出した事に私はとても満足した。

## Untitled

巖 茉悠 (短期大学部 美術分野 日本画領域)



### 日仏交流

この展覧会は日仏交流も兼ねており、準備期間中フランス人に何度か作品案の批評を受けた。フランス人たちは今を生きているという意識がとても強く、「過去の香りはない」と言い放った。そうして交流を重ね、フランス人と日本人の感覚、時間の捉え方の違いを真に実感した。このことがきっかけとなり、私の作品は大幅に変わった。まず、香りが自然に混ざり合う様子を人工的にすることで作品であることをより強調した。そして香りを時代ごとに分けるのをやめ、一時的な香りのみに変更し、外面内面共にスマートにした。

### 完成した作品

「思い出の香り」がテーマである。展示会場が元小学校ということから私の小学校時代の香りを再現した。材料にはレンガ、植木鉢、食器、文房具、落ち葉、枯れ枝、電子機器端末、シャンプーボトル、ヘアオイルボトル、香水瓶を使った。材料をそれぞれ別にし、大きさを大中小に分けハンマーで砕き、形のグラデーションを作った。その素材を隣り合わせに並べ、小さくなるにつれ物の粒子が混ざり合うようにした。植木鉢やシャンプーボトルなどの人工物は現在の物を使い、文房具は当時使っていた物、草木は私が小学生の頃遊んでいた公園の物を、というように思い出に所縁がある物を意識して用意した。ハンマーで物を破壊した目的は粒子を細かくし、匂いを誘発させるためだけではない。破壊することは体力や精神力を奪い、また取り返しのつかない行為であるが、新たな事実や感情に向き合うきっかけとなる。一度潰れた物には可能性があるというポジティブな在り方を表現している。

### まとめ

今回の展覧会を通し、人との関わり合いなしに作品が完成しなかったことを実感した。多かれ少なかれ意見の衝突はあったかもしれないが、そこで生まれた新たな思考は価値のあるものであった。

## Not able to know

大西 このみ (芸術学部 造形学科 メディアアート)



今回香りのアートプロジェクトに参加するにあたって、「概念的」なものの香りを嗅ぐ、という事をコンセプトに作品制作に取り組んだ。香りを発するありとあらゆる物のなかで生活している私は、目に見えない「概念」の香りなど嗅いだ事がないうえに、想像した事もない。知るはずのない香りを知る事を自分なりに表現しようと思った。

実際の作品内容は、言葉の最小単位であるひらがな50音すべてに、ひらがなの成り立ちから想像される香料を用意し、それを正方形に切った紙に染み込ませ、シャーレに閉じ込める。体験者は嗅いでみたい言葉を思い浮かべ、1文字ずつ封筒に選んで入れてもらう。最後に、封筒の中を嗅いでもらう、と言った流れの作品である。元小学校という場所に対応させて、初めて学ぶ言葉であるひらがなを選んだ。黒色の紙について来場者から何度か質問を受けたが、これは香料を付けた際のシミが目立ってしまわないようにするためである。制作の最終段階まで持ち帰ってもらうための入れ物が決まらず悩んでいたところ、Boris から洋封筒にするのはどうか、と提案された。洋封筒のような格好のいい入れ物にすることで、より私の作品に目を向けてもらえるのではないかと考え、その意見を取り入れた。

自作の香料も、どんなに強い香水も、いずれその香りは消えてしまう。香りという儚い媒体をインタラクティブ形式で展示したことが、鑑賞してもらうだけという普段の私の一方的な展示の形式から解放されたような、新鮮で挑戦的な体験であったように思える。これからの制作活動に幾らかの影響を与えられた気がした。作品にはまだまだ未熟な点が残っていた。自力で香料を作るには知識が乏しく、限界があり、望んだ香りのする香料が何本か出来上がらなかった。香料によって持続性に大きく差があり、香りがすぐに消えてしまうひらがながあり、作品全体が弱く見えてしまった。金銭的な問題で見た目がチープになってしまった。以上の問題が解決しなくてはならない点であった。また、成り立ちから”私が”想像する香料を使用したため、主観が入り過ぎてしまい、体験者にとって納得のいかない部分があったかもしれない。「あ」と言えばどんな香りと結びつくのかというイメージに基づいて香料を用意していたら、また違った面白みの作品が仕上がったのかもしれない。

日仏交流展示を通して、自分がいかに限られた空間に捉われているかを実感した。初めての外部での展示で少々萎縮してしまっていたが、フランス人のアーティストたちは会場内はすべて自由な展示スペースだ、と言わんばかりに制作をしていたように見えた。私はこの機会に、確かに自分の活動の糧にする事ができただろう。

### 作品の意図

香りの元を辿った時、発する物体に必ず辿り着く。香りは目に見えない物なのだが、私は物理的に存在すると思うのである。香りの空間を作り出しているものが物質ならば、ひとつの香りに一体どれほどの物が関係しているのか。このように香りの要素が深く複雑なことから、香りそのものにアート性を感じた。そして香りを作品にするにあたり、ビジュアル化するとおもしろいと思った。

### 初期の作品案

そこで最初に考えたのはある空間の香りを色で作る方法である。ガラス鉢に水を張り、水の中に様々な色の絵の具を溶かして入れ、自然に混ざり合う様子を作品にしようと思った。そして今回の展覧会のテーマである「時空」に従い、色の配分を変えたガラス鉢をいくつか作り、時代(時空)に分けることで、香りを比較する2つ以上の対象を作ろうとした。



## 鑑賞のワークショップ「匂いの地図をつくらう！」

國米翼 (芸術学部 デザイン学科 観光デザイン系)

### はじめに

現在、私たちが鑑賞者として芸術・美術に触れるとき、そのほとんどは「見ること」を前提としている。それは絵画や彫刻、版画などの視覚芸術にとどまらず「嗅ぐこと」を中心とするはずの嗅覚芸術（香りのアート）においても同じことが言える。「香りのアートの展覧会」を考えたとき、これまでのような視覚ありきで「見ること」に依存した鑑賞方法では、作品の魅力や意図を十分に伝えきることができなと感じた。そこで、私はこの度の展覧会において作品を制作するのではなく“作品の鑑賞方法を考える”という視点から香りのアートへのアプローチを行うことにした。

これまで当たり前とされてきた視覚主導な鑑賞のあり方、「見ること」を前提とした作品のあり方について、改めて考えることのできる機会の提供をテーマとし、香りのアート作品および展覧会そのものをより楽しむための仕掛けとなるようなワークショップを企画、実施した。

### 新たな鑑賞体験の提案

香りのアートに適した鑑賞方法を考えることは想像していたよりも難しかった。「見ること」に依存しない鑑賞というだけであれば、視覚を遮断し他の感覚で作品を捉えられるように工夫することで実現できる。しかし、それでは「見ること」を他の感覚に置き換えただけで、一つの感覚に依存しているということには変わりはない。今回の取り組みでは「視覚に依存しない鑑賞方法」を考えるだけでなく、「香りのアートに適した鑑賞方法」を考えることにも重点を置いている。そのため、既存の考え方にとらわれないよう心がけた。「見ること」に依存しない鑑賞とはなにかと考えているうちに、それは一方で「目に見えないもの」の鑑賞なのではないかと思に至った。香りのアートの根幹を成す「香り」は目に見えないものであり、今回の展覧会のコンセプトである「時空の切れ目（境界線）」もまた目に見えないものである。同時に、目に見えるものの鑑賞にとらわれていては香りのアートの一部分しか鑑賞できないということにも気がついた。

ではどうやって「目に見えないもの」の鑑賞を実現させるか。温度や湿度、鳥の鳴き声や土の匂いからその日の天気や季節の移り変わりを窺い知れるように、視覚以外の感覚、全身の感覚を働かせることは、必然的に「目に見えないもの」を感じ取り、目で見える以上に身の回りの現象を想像させる。そこで、自然鑑賞や観光体験など、すでに実用化されている鑑賞行為を参考に全身の感覚を使った感覚体験を作品鑑賞へ繋げるという手法をとることにした。



最後に完成した地図を参加者全員で鑑賞

鑑賞方法や感覚について言葉で説明することは難しいため、実際にいくつかの作業を通して段階的に全身の感覚を使った鑑賞を行ってもらえるよう、実践を伴った参加型ワークショップの形をとった。ワークショップでは、新たな鑑賞方法の提案だけでなく、全身の感覚を使った感覚体験を通して「感覚の豊かさ」への気づきを得てもらうことも目的の一つとした。

### 1. 鑑賞のワークショップ

開催日時

場所：京都芸術センター 南館 3F

日時：7月2日 14:00～15:00, 15:30～16:30

7月3日 15:30～16:30

凱旋展

場所：京都嵯峨芸術大学 研心館1F ROOM2

日時：7月24日 13:30～15:00

#### 1-1. ワークショップの内容

ワークショップでは、主に3つの作業を行ってもらった。いくつかの作業ステップを用意することで、段階的に全身の感覚を使った鑑賞へと移行しやすいように工夫した。

#### ワークショップの流れ

- ・ワークショップの概要と作業内容の説明
- ・3つの作業（およそ各10分）
- ・完成した地図を参加者同士で鑑賞、感想の共有

### ステップ1：シールを貼る

「懐かしい」と感じたところに黄色のシール

「匂いがしない」と感じたところに青色のシール

はじめに、展覧会場の中を歩き回ってもらい「懐かしい」と感じる場所と「匂いがしない」と感じる場所を探してもらった。この際に、「匂い」だけでなく、温度、湿度などの空気感、肌触りなど、様々な感覚を意識するように呼びかけた。「懐かしい」と一言でいっても、その要素には見た目だけでなく様々な感覚が関係していることを自身の感覚で掴んでもらうためである。そして、外枠だけを示した会場地図の上に該当する色のシールを貼るという作業を通して、その感覚を明確化し、他人と共有できるようにした。また、特定の匂いではなく「匂いがしない」といった普段あまり意識しないようなことをあえて意識的に捉えてもらうことで、「目に見えないもの」を感じることに慣れてもらうという狙いもある。

### ステップ2：匂い、空気を描く

紙の上に色ペンを使って「匂い」「空気」を描く

次に、シールを貼ってもらった地図の上に色ペンを使って展示空間の「匂い」「空気」などを描いてもらった。この行程では、先ほどの作業で意識してもらった点的な感覚から、より全身を使った感覚体験への移行として、「描く」ことを行ってもらった。地図を描くためには必然的に空間全体を意識する必要がある。また、感覚で捉えたものを「描く」ことで、「目に見えないもの」をより具体的なものとして観察することにもなるため、本企画の第一目的である「全身感覚的な鑑賞体験」に繋がるものとしてワークショップ内のメイン作業とした。

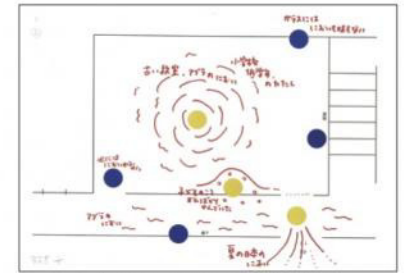
道具には油性マジックペンを使用し、描き方には制限を設けず、文字の記入や図案化なども可能とした。

### ステップ3：境界線を描く

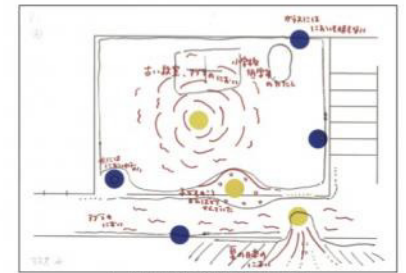
地図の上に「空間の境目」を描き入れる

最後に、これまでに制作してもらった地図の上へ「空間の境目」を描き入れてもらった。これまでの作業を通して「目に見えないもの」を捉えることに慣れてもらっているため、この作業では展覧会という空間全体を“鑑賞”してもらうことを意識した。空間の中に境界線をイメージすることで、目に見えるものに限らず、目に見えない香りや空気なども作品になりえると感じてもらうためである。

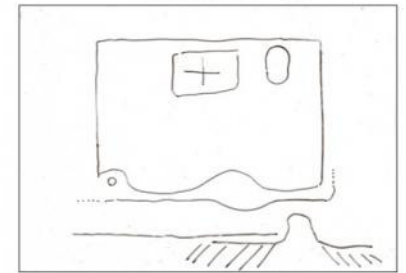
描き入れる際には地図作成に用いた用紙の上に透明フィルムを重ね、後に取り外しができるようにした。黒マジックペンを使用し、描き入れられるのは線のみ限定した。



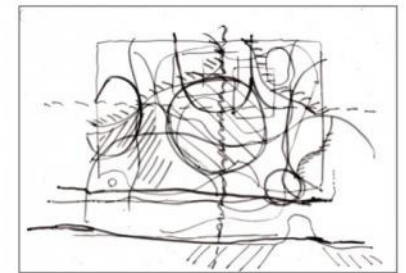
a. ステップ1とステップ2 終了後の地図



b. 全作業終了後 完成した地図



c. ステップ3 の内容だけ抽出



d. ステップ3 だけを重ねた図



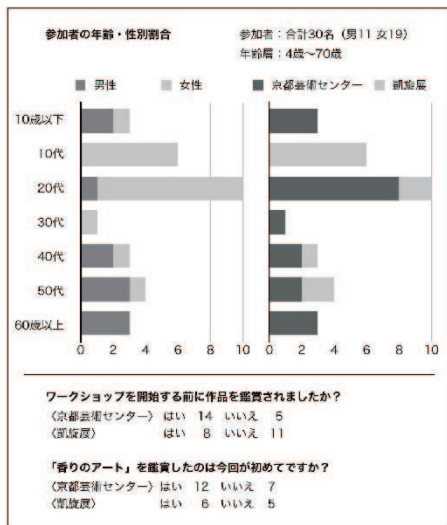
## 1-2. 実施結果

〈第一回〉7月2日 14:00～15:00（6名 男3女3）  
〈第二回〉7月2日 15:30～16:30（5名 男1女4）  
〈第三回〉7月2日 15:30～16:30（8名 男4女4）

〈凱旋展〉7月24日 13:30～15:00（11名 男3女8）

## アンケート結果

参加者の声を集めるため、ワークショップ終了後にアンケート用紙を配布した。内容は年齢、性別、いくつかの質問、感想など。



アンケートで集計した各種データ

## 1-3. 参加者の声

会場である教室独自の匂いがすでにしっかりとあったので、「嗅ぎ分ける」という行為が難じられた。自分にとって嫌な匂いの方が記憶に残った。（30代 女性）

無臭という場所はあまりなく、無意識と意識するものでは印象が変わるなと思いました。（20代 女性）

地図の重なり方が案外似通っているのが驚きでした。（20代 女性）

匂いを一つ一つ嗅ぐのは、通常の美術作品を視覚だけで鑑賞するよりも時間がかかると感じた。（50代 男性）

普段“かおり”という存在を「意識して“かぐ”」という行為はあまりしませんでした。ですが、自分で意識を向けるだけで普段気づかない“かおり”にも気付くことが出来るという発見がありました。（20代 女性）

嗅ぐことの中に、受動的な匂いの取り入れと自ら積極的に鼻を近づけていくことの違いがあることに気づかされた。（60代 男性）

子どもと一緒に体験できるワークショップで楽しかった。子どもならではの言葉が出てきて親としても面白い一面を見る機会でした。（4歳 男性 感想は親御さん）

## 1-4. 考察

同じ空間、作品を前にしているにも関わらず、完成した地図はそれぞれに全く違うものとなった。このことから、多様な感覚で鑑賞することで、より個人的な鑑賞体験へとつながったのではないかと考える。また、アンケートに書かれた感想と地図に描かれた内容に差がある方もおり、「感じる」と「表現すること」の違いや難しさを見ることもできた。

## 2. 凱旋展

凱旋展では会場の変更に合わせて少しばかり形を変え、初日の7月24日のみワークショップを行った。当日は大学のオープンキャンパスということもあり、来場者の動向が予想できなかったため、時間を指定し参加者を募って行うのではなく、来場された方の中から希望者に随時説明し、個々で作業してもらう形をとった。

個々での作業とするために時間の配分や制限をなくしたが、京都芸術センターで行った時と比べてもそれぞれの作業ペースに大きな差は出なかった。その他の作業内容には変更を加えていないため、作業時間による差異を出さずに実施できたと考えている。

また、京都芸術センターとは違い、会場自体に特別な匂いや印象を感じないホワイトキューブでの展示であったことから、参加者の感想や完成された地図には興味深い相違がみられた。印象的だったのは、凱旋展でのワークショップでは会場や展示空間に対する感想がほとんどなかったことである。一方で、「視覚以外の感覚を使うこと」や「ものの見方」に関する感想を多くいただいた。

## 2-1. 参加者の声（凱旋展）

「目を使うこと」をいつもしているんだと実感しました。匂い、空気感を意識することで全然感じ方が変わるんだと思いました。（10代 女性）

香りの境界線も人によって違ったりと普通の展示会ではしたことのない感じでした。（10代 女性）

視覚だけにとどまらない他の感覚を動かす展示がユニーク（40代 男性）

最初は目に見えるものだけを鑑賞しましたが、匂いなど、感覚で体験するのは新鮮でした。物の見方が変わる作品、ワークショップでした。（10代 女性）

## 3. 匂いの地図とワークショップ結果の展示

ワークショップで作成してもらった匂いの地図は、展示会の期間中、展示形式で会場内に掲示した。ワークショップに参加できなかった方にもそれらの地図を見もらうことで、作品に対する感じ方の多様性や、新たな鑑賞方法、香りのアート鑑賞のあり方について、考える機会を提供するためである。

## 4. 日仏交流について

日本とフランスの交流展ということで文化や背景の違いが混在する展示にもかかわらず、共通の感覚や懐かしさを感じるという声があった。このことは、文化的差異に関係なく、作品やその展示空間に共通する何かが存在することを証明するものであり興味深かった。今回のような、出展者に多様性がある展示会であるほど、作品はもちろん、それを鑑賞して得られる体験もより豊かなものになるのではないかと感じた。

## まとめ

ワークショップを企画し自ら実施するのは今回が初めてであったこともあり、説明の仕方や進行方法には多くの反省点が残った。しかし、新たな鑑賞体験を提案するという目標については、参加いただいた方からの感想の通り、確かな手応えを感じた。今後は、全身を使った感覚体験を鑑賞体験に結びつけることはそのままに、実践の形に改善を加えていきたいと考えている。

また今回、参加者から感想とともにワークショップの進め方に対するアドバイスをいただくことも多く、鑑賞方法を

考えるということは、主催側やアーティスト側からの一方的な提案ではなく、来場者とともに作り上げていくものなのだと感じた。今後も「展示」や「鑑賞」というものを考えるとき、このように来場者の視点とともにあることを大切にしていきたい。



京都芸術センターでのワークショップの様子



凱旋展でのワークショップの様子



作成した地図とワークショップの様子を展示



## そこにあるもの

伊智 万莉奈（短期大学部美術分野日本画領域）



### 概要

生活していると、自分の近くにあるのに気づかないものが沢山ある。それらはそこに確かに存在しているのに、私たちが見過ごしている日常風景の一部と化す。今回の展覧会で展示した作品は、このことを表面化するために制作した。そして、明治期の建築である京都芸術センターという歴史ある場所で展示を行うことになったため、場所と生かし、てるてる坊主を使って作品をつくろうと考えた。

### 材料

てるてる坊主は、人からもらった古着を使用している。試作の段階では、白いガーゼを使っただるてる坊主を作っていた。しかし、実際に京都芸術センターで展示してみると場所に馴染まなかったため、好きな古着を使うことにした。はじめは古着を買うことにしていたが、フランス側を京都に迎えたプレゼンの際に、Boris に皆から古着を集めた方がいいとアドバイスをもらい、納得したためそうすることにした。普通の布を使うよりも、着ている人の生活が現れる古着を使用することで、持ち主の存在をゲストに視覚のみならず嗅覚的にも訴えることができる。実際に着ていた人がいたことを主張するために、もらった人の写真も展示した。そして、13名からパーカーやシャツ、デニム、バッグなど50枚ほど古着を買い、そこから100個以上のてるてる坊主を作った。頭には持ち主の古着と一緒に保管して匂いを移した綿を使って、できるだけ同じ匂いが持続するようにしている。

### 展示

作成段階ではてるてる坊主がひとつひとつ独立した存在となっていた。しかし、展示をする際に廊下を奥まで全て利用して、てるてる坊主をまとまった形で天井から吊ると統一感が生ま

れ、場所と共鳴しててるてる坊主が深い意味を帯びたような不思議な空間ができた。会期中は、幼稚園児から高齢者まで様々な人がてるてる坊主に興味を示し、若いカップルはてるてる坊主を背景に写真を撮ったり、社会人の女性は手で触れ匂いを嗅いだりしていた。人がてるてる坊主に触れ、関わりが増えるほど、そのてるてる坊主の存在理由が生まれる。この作品は、てるてる坊主の作成から会期中も一人の力ではなく、他者の力があって成り立っている作品である。

### ワークショップ

7月3日の12:00~18:00に展覧会場で行ったてるてる坊主をつくるワークショップでは、5~50歳の方々が15名参加してくれた。古着を持参してもらい、それを好きな大きさにカットして自由に組み合わせ、てるてる坊主を作ってもらった。作ったてるてる坊主は、持ち帰っても会場内に置いてもよい自由な形式にした。ワークショップは、子供たちを中心としてにぎわい個性豊かなてるてる坊主をどんどん生み出していた。幼稚園児の男の子は、お母さんと同じ古着の組み合わせを再現したてるてる坊主を作り、女の子は古着を三枚つかったレイヤードスタイルの体長20cmのてるてる坊主をつくっていたのが印象的であった。

### 日仏交流について

今回の展覧会で一番刺激を受けたのは、フランス人との制作日々だ。いままで外国人と一緒に同じ空間で作品をつくることがなかったため、文化が異なると一筋縄ではいかない難しさがあった。日本では、てるてる坊主は晴れを願うまじないだと老若男女が知っている。しかし、海外ではこのような物が存在しないため Skype を使った会議では、どうやって上手く伝えるか四苦八苦した。制作中は、作品について揉める場面を数えきれないほど目撃した。そしてフランス学生 Samuel の作品を通じて、日本では日常風景であるマスクをつけた人が、フランスでは反政府主義の運動と見なされる意味を持つことを知り衝撃を受けた。交流の中で、フランス人は芸術を追及する姿勢と社会に対して自分の意見をはっきりと持っていることを感じて、いまの自分のあり方を考え直し、今後の制作に生かせる刺激を受けた展覧会であった。

## Masks

Samuel Blazy（Beaux-Arts de Paris）



En arrivant au Japon, mon travail est depuis plusieurs mois lié à un mouvement très important en France qui remet enfin en cause tout un système (cf mouvement loi travail). Etant très intéressé par le politique, l'observation de la société et ses dérives, j'aime travailler en observant mon environnement, d'une première phase de récupération à un assemblage, un détournement, une mise en scène.

J'étais content d'être accueilli à Kyoto dans une école, un angle privilégié.

J'ai présenté une série de masques fabriqués avec des bouteilles de poubelles de recyclage. Se masquer est un geste sur lequel je réfléchis, en France c'est interdit, et décrié car il permet l'anonymat et la protection contre la répression au sein des manifestations.

Au Japon c'est un geste poli, sanitaire lié à la densité de population dans les villes.

Il m'a semblé que le bien vivre ensemble est ce qui régit l'ordre de la ville japonaise, un contrôle de soi permanent, un ordre qui s'impose.

日本に到着したとき、私はその直前の数か月間フランスでの非常に重要な運動に関わる作品を作っていた。この運動は労働法のような社会システムを問題とするものであった。政治、社会監視、そこから派生してくるものに非常に興味があったので、最初の段階では自分の身の回りを観察し、アッサンブラージュや引用、映像のための素材を集めていた。

京都では大学に招かれ、特別な待遇を受けたことがとても嬉しかった。

私はリサイクルボックスの中に捨てられていたペットボトルでマスクを作った。私が考えるに、マスクを被るのはフランスで禁じられ、避難される。なぜならマスクを被ると、デモ集会などで匿名の存在になることを許してしまい、政府の抑圧に対して防備していることになるからである。しかしながら日本では都会の人の多さに関係して、マスクをすることは礼儀正しいことであり、衛生的だとされる。私にとって、日本の都会で人と一緒にうまく暮らすことは、秩序を保つことであり、絶え間なく自分を制御することであり、また自らに課された秩序に従うことのように見えた。

(訳 岩崎陽子)



## River

Hila YAMADA (Associate Degree Japanese Painting)  
Takumi MASUI (Faculty of Fine arts Section of Media art)



### Description

River was displayed between the 2nd and 3rd floor of Kyoto Art Center as an art installation. Giving the impression of a flowing river, a video image of incense smoke was projected onto one of the steps in the middle of the stairs. Beholders could privately type things that they wished to have expunged from their lives onto a PC screen. A moment later, their words appeared to float away in the river, never to return. Synchronously, a very subtle fragrance of incense – evocative of funerals for Japanese people – was constantly present.

### Theme

The time-honored superstition that depicts rivers as a boundary between our world (Konoyo in Japanese, which contains the essence of koko) and the other world (Anoyo in Japanese, which contains the essence of asoko) is not only prevalent in Japan, but also in many other countries. In this work, the boundary between these bipolar worlds is represented by the moving image of incense smoke, which appears as the river. It approaches beholders to involve them with the work, appealing to our latent idea of Styx. This mythological river of Hades, though imperceptible to the eye, unconsciously exists in our minds; a property that it shares not only with the way the Japanese demonstratives koko, soko, and asoko are pronounced (the title of this work's exhibition), but also with the ubiquity of scent.

### Examination

Firstly, the site itself complemented the perfor-

mance of the incense to smoothly lead people into its Hadean context. The 3rd floor, with its normally forbidden access, took on the role of the other world. In addition, the large window facing these stairs, which provided a view of the sky, accentuated the effect.

Secondly, the action of something floating down or being thrown into a river embodies a common symbolism for people; a fact this work made use of. It brought beholders mental purgation, resulting in satisfaction or refreshment as they observed their negative words or sentences vanishing into the river.

Lastly, River took the form of an installation. Therefore, this work could not be completed without the interaction of its beholders. Its visual aspect was constructed by not only the physical operation of the keyboard to enter negative words by people, but also their imagination and feelings regarding the existence of the other world within the work. It represented as many different shapes as the number of people who interacted with it in a very personal way.

However, there was a problem with creating the smoke river. In the original plan, I intended to use real incense. The site, however, being of great historical and architectural value, could not be put at any risk, especially that posed by a burning object. As a result, the smoke had to be alternatively created by a video.

In fact, this matter caused many technical challenges such as capturing smoke at a uniform speed and shape. Additionally, adjusting the moving image's size and brightness to the black wooden stairs and selecting the most appropriate spots for the two projectors it required in such a limited space created further difficulty. Besides these challenges, programming the system for the word-typing function proved difficult for our technical level.

Ultimately, however, this project was a thoroughly

progressive experience for both creators. Masui was responsible for the mechanical operations and I, the esthetic direction. And the important thing to note is that Masui and I were both working on the clear perception of the equality in the creation. Although we both are being compelled to face this controversial aspect due to the general perspective of hierarchy frequently represented by this kind of collaboration work.

My position can be easily recognized as more essential for the master piece compared to Masui's simply because I provided the primal idea. However, an art piece evidently requires practical skills or physical process for actualization. Thus my ideas never be able to realize without not only Masui's technic but also his absolute comprehension. Which clearly shows the equivalence of importance between Masui and me, in other words, practical skills and ideas upon artistic creations.

That is, I recognize that this work possesses an aspect of one of the most significant new forms of contemporary art: specialization. The tendency towards this movement is becoming a trend in contemporary art due to the enlargement of the physical scale of a growing number of works in the last decade. The biggest merit of specialization is the possibility for an epoch-making creation consisting of the exquisite fusion of entirely different fields or techniques. Since Masui and I belong to the seemingly unrelated majors of media art and Japanese painting, but nevertheless, using our respective expertise managed to accomplish the aims of the work, River can be considered as a successful fruit of this movement, regardless of its scale.

### Exchange between French students

We invited 4 French people, Boris RAUX as an artistic adviser, Ninon GOUTELLE from École de Beaux-Arts de Lyon, Alexandre MORRIS and Samuel BLAZY from École des Beaux-Arts des Paris for the exhibition to work with.

It was very inspiring precisely to see how Alex and

Samuel's strong political ideas and rebellious spirit influenced their work and, more generally, their relationship with authority. Perhaps this kind of individualism does not particularly applies to them but French people generally I assume. However, they reacted precisely when any kind of authority as which organizations got some effect on their volition. More specifically, they tried to against quite many strict security rules of the grounds as much as possible. That was not grateful thing for me as a coordinator of the exhibition who was aiming to organize things peacefully to be frank. Although I admit that they already have the strength and fundamental attitude in order to pursue their own creation as independent artists regardless their ages. And that is what we, Japanese young students should be aware of more I felt.

For the end, from the point of view as the main interpreter for the project, the biggest fruit regarding to this time international exchange was to witness developments upon other younger Japanese members. They had hardly got experiences to talk to foreigners in their pasts. But this project gave them a very valuable opportunity to experience the excitement of communicating with foreign people and learn different cultures and different way of thinking. Consequently some of them get inspired deep enough to be encouraged for studying foreign languages more earnestly. And I eagerly hope it became a trigger to broaden their horizons to the out side of the narrow society they yet currently flamed by.

(Written by Hila YAMADA)



## French kiss

Ninon GOUTELLE (Beaux-Arts de Lyon)



What a great experience to be in Kyoto for this project, I wasn't just a tourist, I met some people that I would never met if I was just in « regular » holidays.

I had this opportunity to work in a new territory. I tried to work « in situ » and find a way to amuse myself in this new playground. I was searching something that I can not control. My curiosity for this country was the first step to get the inspiration for the exhibition.

It was hard to find the idea, as we all know it's a long process and I was a bit confuse the first week, I had too much to see. Japan was too generous with me, I had a lot to see, to hear, touch, taste and smell.

Smell was my priority, I had this thematic (medium or tool in a way!), something that I've never work with. Because we were exhibit in the KAC, in an old class room, I had also the school thematic. I began to think about all my smelly memories about my childhood and my young years in school. I was trying to find some smelly materials that I can work with. It was always something that I can taste ad not just smell. The chewing gums were the material that I decide to work with. Because in my mind, it's related to the lonely hours I spent in a class room : You are bored, you're not listening to the teacher, you're in your dreams, it's warm and you can make up your own stories. Your little dream is stopped when you're chewing gum is not tasty anymore, the bell ring, that's the end of the class and you have to go out. But before leaving the class room, you put your gum under your desk. If you take a look under this desk at the end of the

year, you can see the collection of a lonely child that prefer to chew instead of learn.

This first intuition of a project was confronted to the japan lifestyle : it's impossible to think about putting a gum under a desk. Some japan students explain to me that it is "so disgusting » and that they will never think of doing that. This contradiction interested me. As a french girl it was very banal and anecdotic, but for the japanese it was a disgusting experience. It was a first exchange about our different points of view between our two cultures and the relation with smelly materials. I continue to search and think about all of that. My method of working was to walk alone in the streets of Kyoto, I found this same state of mind that I have when I was a child. As I was discovering the city by myself, I was chewing gums as the kid that I used to be. I thought I've never stopped to be this kid that was dreaming and not satisfied by the reality.

In kyoto, I was confronted to another reality, the look of japan boys. I was the stranger girl from occident, i could see the curiosity that they had for me. I started to ask to the japan girls that I know and also to a french gril living in Kyoto about the relation between japan boys and occidental girls. Japan guys were very attracted to french girls because we are the "idea of charming and seducting girl very opened about our sexuality". I understand very quickly why some guys were curious about me, I was the cliché of the french girl that can teach them how to love. I decided to do something about this funny way of seeing a love relationship.

I did some fake french-kiss with japan boys when I was walking in the streets of Kyoto. I took some picture of boy that I would kiss just because at the first look I think they are charming. With this portraits of boys, I did a photo-montage of me kissing them. I had at the end a collection of postcards that show my fictional love affair with a japan boy. ke when I was a child, i make up my own stories with a gum in my mouth. The postcards were put in the KAC class room with the differents gums. And also the soundtrack of my love dreams : different japan and french love song

with the sound of someone chewing and making some bubbles with a gum. The text of my participation to the exhibition is :

*A french girl is walking on the streets of Kyoto trying to have a romantic moment with someone. She chews japanese gums and keeps the track of these fugacious love affairs by collecting gums as a memory of the french kiss.*



## 制作指導を通して

松本 泰章 （芸術学部 造形学科 メディアアート分野教授 大学院教授）

ニノンの作品構想プレゼンテーションに驚きました。今回、小学校の教室を展示場所に使用することから、自身の幼かった頃の思い出を題材に 構想した内容です。小さいとき、口に含んで囁んでいる途中のチューインガムを親しい友達と交換した思い出です。驚いた私達に彼女は自分だけの特別な思い出ではなく、フランスの子どもたちには普通のことだと言っていました。驚きました。同じ鍋をつつかないフランス人が、こどもの頃は直接に唾液の交換をしていたのです。彼女の作品は「フレンチ キス」というタイトルで、彼女と誰かの写真を合成したイメージに噛み終わったチューインガムを添える形で完成しました。その行為は大変興味のあるものとして私の記憶に残りました。

フランスや西洋の人たちの香水の文化を「体臭を隠すために香水が発達した」と教えられ、そういううものだと理解してきました。しかしこのことは私のそれまでの理解を変えてしまいました。「体臭を隠すために香水が発達した」とか「匂いによって匂いを隠す」と言った理解は、消臭に熱心な現代の日本人の視点から解釈された誤解ではないかと思うようになりました。フランスの人たちは、自らの匂いを様々な香る個性的な香りに混ぜ合わせて、相手に与えることが目的なのではないかと考えることが出来ます。そう考えると、香りというものが持つ特性と、メディアアートの特にインタラクティブな要素が、すごく近いものであるということがわかります。つまり、香水そのものが表現ではなく、自分の匂いと混ぜ合わされた香りが自己の表現となり、それを直接に相手に届けるということは、参加者の選択や行為が作品を変化させ、参加者と作品を結びつけて独自の表現を作り出すメディアアートのインタラクティブな技法が持つ特性と親和性があるということです。この二つはどこか似ています。

文章は書かれただけでは存在しない。読まれることによってその都度、新たに生まれるとよく言われます。このことは、美術や音楽などの様々な芸術表現にも当てはまりますが、香りを扱う芸術には特に顕著であるように思われます。美術館にある著名な作品や、楽譜に書かれた楽曲等とともに、香水瓶に入った香水も個性的な作者による創造物には違いはありません。しかし、その香りは匂うこと、誰かの匂いと混ざり合うことで初めて存在します。文学や美術、音楽も誰かに読まれ、見られ、聴かれることによって存在します。同じように、香りを使用する表現は香りによって作者と個々の鑑賞者を直接結びつける力が強いことをあらためて感じます。

今回の作品展でも、少しわかりにくい表現に対しても来場者が個々の作品に直接鼻を近づけて時間をかけて鑑賞している姿を多く見ました。匂いが持っている人々を直接結びつける様子を実感しました。

香りは制御が難しく、現代芸術作品としての作例はそう多くはありません。しかし、作者と体験者を混ぜ合わせ、体験者を積極的に表現行為にまで参加させるという香りを用いた表現技法は、いままでにない参加型芸術の表現手法として大いに期待出来るメディアム（媒体）となる可能性を秘めていることを強く感じます。

今回、日本側の学生達の制作の指導を担当させていただきました。香りが大変扱いの難しい素材であること、会場がとても特殊であること、作品数が会場の大きさに比べてとても多いことが今回の企画展の大きな問題であることを共有しながら進めました。途中からフランス側からの情報も加わり、今回初参加の学生にとっては何もかもが未経験な状況の中での準備となりました。その中で、自分の作品のコンセプトを練り上げてゆくのはとても難しいことですが、学生達は溺れながらも、知らないうちに泳いでいることを体験するような感じではなかったかと思います。いままでにない展覧会の経験は全体の準備を含め、各自の作品を学外で多くの人々に見ていただけたこと合わせて、とても貴重な体験となり、確実に彼らの力になっていると思います。





## La famme

Hila YAMADA (Associate Degree Japanese Painting)



### Description

*La famme* is an experimental live performance involving olfactory sense. It requires the participation of eight volunteers of differing sex, ages and nationalities. At first, they are blindfolded and given a red rose to hold in their right hand, and a white rose to hold in their left. In addition, they are asked to stand in a circle. Finally, the performer enters the room and walks into the middle of the circle with a bell and a perfume specially blended for the performance. She opens the perfume bottle and applies the scent. The volunteers take one step toward her each time she rings her bell. They stop as soon as they smell the perfume and drop one of their roses: red should they feel sexually attracted by the fragrance, and white should they not. Once all of the volunteers have stopped advancing, she gets close to the individuals who have dropped their red rose. One by one, she tries to transfer her scent to them by touching or holding them so that they are able to feel her entering their personal territory.

### Concept

Smell has forever been considered as one of the most essential and strongest factors with regards to attraction. In 19th-Century France, before the concept of “pheromones” existed, Augustin Galopin tried to reveal the logic behind the attraction of women’s smell to men. He identified a number of specific fragrance elements that he believed fascinated men and categorised them according to woman’s hair colour. For example, blonde ladies

he believed smelt like musk, ambergris for ginger hair and violet and sandalwood for brunets. Therefore, he believed that a perfume containing all these essences must surely be the most sexually magnetic regardless of the lack of scientific consistency within his theory. This is the perfume that was used for *La famme*.

The performance acts as a device to define the borderlines of smell between individuals. It reflects a diversity of ways in how people capture and experience one another’s scents and the astonishing differences in affection we undergo depending on physical distance.

### Examination

First of all, I must admit that the initial performance was still at a very experimental stage. The concept itself was well received by a majority of the audience; however, inadequate preparation lowered the quality of its execution. Here are three significant aspects that could be improved upon.

#### 1. Explanation

Professor Yoko IWASAKI and the artistic adviser, Boris RAUX assumed the role of introducing the performance to its audience and instructing the volunteers on how to proceed in both Japanese and English. The position of Yoko and Boris was required in order to avoid the volunteer’s sight of the performer influencing their olfactory function. However, when I, the performer, rang the bell, some of the volunteers started walking towards me instead of taking a single step, clearly not understanding what they were supposed to do.

One of the most important aspects of a performance is its ability to create its own atmosphere. This can be easily spoiled by a collapse of order, which is what appears to have happened during the initial performance of *La famme*. In fact, some of audience and volunteers reported to me that the explanation was not clear enough. Thus, due to my inability to completely and effectively share my vision with both Yoko and Boris, I failed to establish my intended atmosphere.

#### 2. Condition of the space

It was very unexpected that almost half of the volunteers were unable to catch the scent of the perfume despite their close physical distance (in fact, they were almost touching me). Conversely, some members of audience who were much further away were able to capture it almost as soon as I opened the bottle. The reason for this I assume is that the scale of the room was too small for the amount of works being exhibited, especially when half of them included a variety of smells. It is indeed incredibly difficult to smell something else once your nose is occupied by another significant scent. Therefore, those volunteers who could not smell the perfume were really confused, which hindered the quality of the performance significantly.

#### 3.Excessive description

After the performance, I attempted to give the audience an intelligible explanation regarding its concept and other details. I did so as I feared that the performance would not be understood or accepted by people. However, on the contrary it was considered as surplus to requirements and possibly took away some scope for the audience’s imagination. It is indeed always very hard to find a balance between objectivity and subjectivity upon an artistic creation. Although, it is not necessarily important, or even possible, to force people to fully understand your own theory.

Ultimately, as is clear from the above account, this initial performance was not completely satisfying. However, fortunately, I still have another opportunity to reenact the performance in London. I firmly believe that performance is one of the most efficient forms to represent olfactory art due to its character of contingency and ubiquity. Therefore, I intend to improve the quality and the shape of *La Famme* earnestly by taking full advantage of the experience acquired from this exhibition.



## 世界の「境界」は変えられるか

—香りのアート展覧会「ここ・そこ・あそこ」を  
オーガナイズして—

キュレーター：岩崎陽子  
(京都嵯峨芸術短期大学部 専任講師)

### ここ・そこ・あそこのボーダーライン

私は幼少期を過ごした滋賀から京都に引っ越して18年になりますが、一番京都に住んで驚いたことは当時のマンションの大家さんから「なには、なにで、なににすべきはったんやねえ。ごころうさん」と言われた時でした。大家さんの言いたいことは、「お子さんは、自転車で、保育園に預けて来たんですね、ごころうさま」という意味でした。これは「ダイクシス」(直示)と言われ、「具体的意味が文脈によって定まる表現」のことです。(このことを教えてくれたのは本展覧会に参加している國米翼でした。) 上記のような大家さんと私のやりとりは他人にはちんぷんかんぷんですが、朝方に自転車を引きずって保育園方向から帰宅した私に大家さんが掛けたねぎらいの声は、私には定まった意味としてちゃんと現れました。

「ここ・そこ・あそこ」も、その範囲は文脈、人間関係、国籍などによって異なります。「ここ」と「そこ」、そして「あそこ」の境目をボーダーラインとして区切るということは、とりもなおさず自らの属性(価値観、人間関係、国籍)を端的に示しているのではないのでしょうか。「ここ・そこ・あそこ」は、空間の距離を表しているだけではありません。時間的な推移や変化のとらえ方も人によって違います。「この前の戦争」が京都人には「応仁の乱」だったなどというジョークがありますが、どういう歴史感覚でモノを見ているかというのは、若者と高齢者、男と女、京都人とフランス人でまったく異なります。今回の展覧会では、そんな目に見えないけれど確実に存在し、自分のなかで「ボーダーライン」として引かれている境界線を、香りや匂いによって表現しようとしてしました。

昨秋にパリの国際大学都市日本館で行った、香りのアートの学生交流展の名前は「Forme d'odeur」(匂いのかたち)でした。匂いに形があるとしたら、そのためには必ず空間との境界線があるはず、というコンセプトだったのです。ここではまだ、「匂い」「香り」が図、空間が地、という図と地のヒエラルキーがありました。今回の展覧会はそこに上下関係をつけませんでした。来場者にとって、時空の果てしないボーダーラインの連続を感じる旅の「出発点」になることを目指しました。

### 香りのアートとはなにか

香りのアートというと、「香水みたいな何か良い匂いを創り出したり、展示したりすることか」とよく聞かれます。または「臭い匂いを嗅がせるのか」となどという質問もされます。そういう意味では、私は「香りのアート」や「匂いのアート」というより、私たちのプロジェクトを「空気のアート」プロジェクトと言った方が良くいと常々思っているのです。

空間を考えると、人はまず机や人などの「物体」に注目します。そしてそうした物体の周りの目に見えない空気が意識されるのはごくたまにしかありません。「あつ、春が来た!春の匂いがする」というのは、確実に目に見えない空気存在を意識したときです。また「陽気な空気が流れる」や「空気読めよ」「時代の空気が変わった」という比喩的な意味で、確実に目に見えない空間に「何か」を感じとっています。それは時空のいずれにも存在します。香りのアートはこうした目に見えないながらも様々な意味をもつ「空気」をアートとして表現しようとしているのです。

### なぜフランスか

フランスの学生との香りのアート交流はこれで3度目です。最初は昨年3月のPARASOPHIAの際に、香りのアート展を市内5か所で展示しました。この時はパリ・ボザールから11名もの学生が来て国際交流展となりました。その後、昨年11月にはパリ国際大学都市日本館で、日本からの学生5人と交流展、そして今回の「ここ・そこ・あそこ」展です。

なぜフランスとの交流なのかと申しますと、香りにセンシティブな国と言えば、香水の国フランス、そして香道という香りの文化を生み出した日本だからです。この二国は他の追従を許さない香り大国です。でも交流を深めれば深めるほど、両国の嗅覚の差異が明らかになってきました。

フランスの学生は「香りのアート」というと、必ず「香りの元」になるもの、つまり海苔や煮干しを作品に使用します。匂いという見えないものの発生源を物質として特定し、そこから作品を発想するのです。

逆に日本の学生は、「香りは見えないもの」という地点から出発し、見えないものを簡単に見えるようにせずに、「見えないまま感じさせる」工夫をしようとしています。だから日本の学生の作品は「雰囲気」や「フェロモン」といった、見えないけれども確実に存在するものを表現します。

香りという共通の媒体を使いながら、二か国の間でかなり匂いに対する感じ方の相違が見られ、それがお互いの文化を知る有効な第一歩になっているのです。日本とフランスの両国は香りというフェーズから見ると面白い国なのです。

### サイトスペシフィックと時空の切れ目

現代アートでは「サイトスペシフィック」といって、制作物が置かれる「場」を考えた上で制作物を構想することが多くあります。特に現代では美術館やギャラリーではなく、京都なら「町家」や「織物工場の跡地」などの特別な空間に作品を展示する機会がよくあります。

今回の展覧会場は京都芸術センター内の「教室」です。このセンターは、もとは「明倫小学校」という日本で一番古い小学校でした。建物の内部はクラシカルな造りで、現代の建物にはない薄暗くて懐かしい雰囲気醸造しています。

フランス側の制作統括をしている Boris はこの建物の由来や雰囲気最大限生かしたかたちで、それを軸に日仏各々の学生作品のまとまりを出そうと考えていました。実際にフランス・チームの制作は、「日本とフランスの小学校の思い出」をテーマにしていました。机や床にイグズラした思ひ出が作品になりました。

一方で嵯峨芸の学生にとって、京都芸術センターの建物は京都で学んでいる以上、そこまでサイトスペシフィックなものに思えないというのが現実です。「古い建物は京都にいっぱいあるから」という理由です。ですので、彼らは展覧会コンセプトである「時空の切れ目」を何とか香りの作品で表現しようとしており、そこまで「場」へのこだわりがないのです。

よってミーティングでの Boris と学生たちの話し合いでもその部分がかなりギャップとなって現れました。キュレーターとしてどうするか、と悩みましたがそれはそのままギャップとして進めてみようと思いました。結局最後までその溝は埋まらず、それについて深い議論ができなかったことが今回の展覧会の反省点でした。

### 香りのアートの楽しみ方

美術において「作者」「作品」「鑑賞者」は重要な3要素です。ふつうはどれが欠けても展覧会は成り立ちません。現代アートでは作者の在り方や作品形態が日々探究され、新しい試みがなされてきました。でも鑑賞の仕方はほとんど変わっていません。「見る」がいつまでたっても主流なのです。

今回はキュレーターとして「香りのアートの鑑賞方法を考える」ことを展覧会の目玉に位置づけました。これは香りのアートというほとんど前例がない展覧会の中でさえも、全く提案されてこなかったことです。國米翼と香りのコンサルタント last note の鈴木涙香さん企画の「香りのアート鑑賞のワークショップ」がその成果でした。

そもそも日常生活での感覚のあり方を考えてみると、視

情報が80%を越えています。とはいえ、音も聴きまし、匂いや味わい、触覚も同時に感じています。視覚情報の内にも他の感覚的なものが混じり込んでいることも多くあります。

しかし五感を頂点とする5角形のレーダーチャート図で知覚を表すと、視覚がダントツで突出したいびつな形になります。これまでの展覧会は、この視覚重視の在り方をモデルに構築され、頑としてこれを変えなかったのです。展覧会は「見に行くもの」だったのです。

この視覚ダントツの突出部分を凹ませるために、目をふさげば他の感覚が活性化するかといえ、ことはそう単純ではありません。

「純度100%の暗闇」を体験する「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」に行ったときに、「不安だったらあちこちを触ってください」と言われました。目をふさぐと人間は不安で他の認識方法を探すことに夢中になり、触覚が視覚の大半を肩代わりするのです。そうすると、先のレーダーチャートが今度は触覚がダントツの膨らみをもってしまいます。目が見える人の日常生活における匂いの役割を、アートによって自然な形で誘発するためにはどうしたら良いか。単純に目をふさいで匂いに集中してもらうという発想では、触覚が取って代わるので無理でした。

香りのアートにとって、見えるものとの関係は非常に難しいものです。鑑賞のことを重点的に述べていますが、作者にとっても、視覚優位ではないけれども自然なかたちで嗅覚を働かせるような香りの作品を作りだすのは至難の業です。鑑賞者が見ただけで満足するような、見栄えのいい作品というだけでは不十分だと考えています。

今回の展覧会の中では全員こうした難題に果敢に取り組みました。特に作品の中に鑑賞者の参加を促す作品が多かったように思います。香りは特性として目に見えないので、受け身のままで気づかれないうまま通り過ぎられがちです。これを積極的に楽しんでいただくためには、あえての「参加型アート」の枠組みが適しているのだと考えられます。

### 凱旋展の実施

京都芸術センターで開催していた香りのアート展「ここ・そこ・あそこ」ですが、閉会後2週間後の祇園祭の時期、7月24日～29日(金)まで京都嵯峨芸術大学研心館1FRoom2にて、凱旋展として再展示することにしました。

キュレーターとして、京都芸術センターという、非常にサイトスペシフィックな空間と180度異なる、ニュートラルなホワイトキューブの空間に作品を再展示することに強い関心がありました。実際に作品を並べてみると、同じ作品で構成されているとは思えない雰囲気醸造しており、やは



り作品とはそれが置かれる空間と相まって存在しているのだと、当たり前ながら強く感じることができました。同じ展覧会作品を、場所を変えて展示するという機会に恵まれ、香りのアートが展示空間にかなり左右されるものであることが明確になったことも大きな収穫であったと言えます。

## 結びにかえて

ミシェル・フーコーの『言葉と物』の冒頭はとても印象的です。動物の分類を次のように定義する古い中国の百科事典が存在するというのです。「皇帝、香の匂いを放つもの、飼いならされたもの、乳呑み豚、人魚、お話にでてるもの、放し飼いの犬、この分類自体にふくまれているもの、気違いのように騒ぐもの、数え切れぬもの…」「哺乳類、鳥類、魚類…」などという我々に馴染のある分類とはまったく異なる、動物についてのこうした奇妙な分類はまだこの調子で続きます。しかしもはや十分にその世界への境界の引き方が我々とまったく異なることはわかると思います。結局、私たちが考えていること、話していることといった認識の全ては、世界に境界を入れることなのです。そして、教育や慣習によってその境界線は年々複雑強固なものになり、時に他者との相違が許せなくなってきました。特にフーコーの著作がいまいくも示すように、物という見えるものと、言葉という共有のためのツールにおいてはその傾向が顕著です。あえて世界の境界を変えてみることは、新しい自分になること、他者へ寛容になることの第一歩ですが、物と言葉にあふれた現在の状況ではそれが難しいのです。

だからこそ、ここで香りが重要になってきます。香りは物と違って目に見えず、言葉をほとんど語彙として持たず、境界が定めにくいものです。かといってわたしたちは香りや匂いの境界をまったく区切っていないわけではありません。それをなんとかアートで指し示すことにより、自分と他者の違い、わかりあうことの難しさ、共感の喜びが見出せるのです。

今回の香りのアートの学生交流でも、若い学生同士が様々な政治的・社会的困難において、お互いの文化の相違点と共通点を日々感じました。香りという「当たり前」でないものを使って、共同制作に励み、共に一つの展覧会を創り上げることができたのは、素晴らしい体験だったと思います。

とはいえ、香りのアートの困難も同時に味わいました。もともと広い空間で香りが混じり合うことを避けるべきでしたが、一つの教室に多くの香りの作品を並べたのでレイアウトに非常に悩みました。また、香りのアートに初めてトライする学生に、その意味するところを各人の創造性を削がない程度に教えることも至難の業でした。展覧会に対する温度差や学業との両立の困難さ、語学の難しさに悩む学

生たちを最後まで走り抜けさせるのも大変でした。それでも日仏学生の皆さんが何十年後にでもこの交流のことを思い出し、そこに何かの意味を見出すことを確信しています。この学生交流は他に見られない革新的で豊かなものでした。

最後になりましたが、何よりもまずこの交流を助成してくださった笹川日仏財団様に謝辞を捧げたいと思います。いつも温かく見守ってくださる同財団事務局長の伊藤朋子様に感謝申し上げます。テロが重なるフランスを含め、世界は難しい状況にありますが、こうした学生交流が平和への第一歩であるという私どもプロジェクトの信念を深くご理解いただき、多くのご助力をいただきました。

また歴史的に貴重な会場をご提供くださった京都芸術センターの皆様にも厚くお礼申し上げます。特にサポートスタッフとして我慢強く我々一同をご指導くださった西尾咲子様に感謝いたします。

展覧会のために特別に調香した香料をご提供くださった高砂香料工業株式会社様と同社の鈴木隆様と山崎定彦様、大切な機材や貴重な知見を快くご提供くださいました株式会社松榮堂様と同社の畑元章様にも心から感謝を申し上げます。

また広報協力してくださったHAPS様、ワークショップにご協力くださったlast noteの鈴木涙香様、学生の宿泊に快く助成くださった常松庵の大門美鈴様にも厚く御礼申し上げます。

ありがとうございました。





# ここそこあそこ

ここ  
koko

あそこ  
asoko

そこ  
soko

## ここ・そこ・あそこ ～香りのアート 2016～

### Kyoto-saga University of Arts

Airi KOGURE  
Hila YAMADA  
Konomi ONISHI  
Marina ICHI  
Mayu IWAO  
Rina SUGA  
Risa OGAWA  
Seiya ISHINO  
Takumi MASUI  
Takumi TSUKAHARA  
Tsubasa KOKUMAI

### technical support

Itsuki KURAHASHI  
Junichi UMEZU  
Ryosuke SHINODA

Beaux-Arts de Paris  
Alexandre MORRIS  
Samuel BLAZY

Beaux-Arts de Lyon  
Ninon GOUTELLE

### 「ここ」「そこ」「あそこ」の境界は

どこにあるのでしょうか？

確実にあるとわかっていても

具体的に指し示し共有することの難しい

「時空の切れ目」を香りのアートで表現します。

昨年末の「黒髪とマドレーヌ」展から半年、

京都嵯峨芸術大学とパリ・ボザールの学生も加えて

パワーアップした日仏香りのアート交流展を開催します。

### Perfume Art Project

Olfactory art adviser : Boris RAUX

Curator : Yoko IWASAKI

Art producer : Yasuaki MATSUMOTO

京都芸術センター 3 階 ミーティングルーム 2 ほか

Kyoto Art Center 3F meeting room2 etc.

2016 7/1(Fri) ~ 7/7(Thu)

Open 12:00 ~ 20:00

Opening Party 7/1 18:00~

入場無料・会期中無休

free entrance

### Workshops/ ワークショップ情報

山田 瑩 Hila YAMADA

7/1 (Fri) 20:00~21:00

國米翼 Tsubasa KOKUMAI

(鈴木涙香 香りのコンサルタント last note)

7/2 (Sat) 14:00~ 15:30~ (所要時間 60 分程度)

伊智 万莉奈 Marina ICHI

7/3 (Sun) 13:00 ~ 18:00 (入退場自由)

※ワークショップは全て 3F ミーティングルーム 2 で行います。

尚、入場無料・先着順です。

日時は変更する場合があります。

参加方法等の詳細は Perfume Art Project のホームページをご参照下さい。

問い合わせ : Perfume Art Project ホームページ

TEL : 080-3101-1839 岩崎 陽子

### Music Concert by Media Art

2016 7/1(Fri) start 19:00~

入場無料 free entrance

Sound producer : Tetsujiro SUITA

7 月 1 日に現代音楽作家 John Cage の作品を

京都嵯峨芸術大学のメディアアート学生が演奏します。

こちらに合わせてご覧ください。



詳しい情報・お問い合わせ先

<http://perfumeartproject.com>



協賛



作品監修: 松本奈卓

ここ・そこ・あそこ ～香りのアート 2016～

2016 7/1(Fri)~ 7/7(Thu) 12:00~20:00 (7/7 ~ 19:00)

京都芸術センター 3 階 ミーティングルーム 2 ほか

地下鉄烏丸線「四条駅」、阪急京都線「烏丸駅」

22 番・24 番出口より徒歩 5 分。

駐車場はご

協力: 青山アーツ・プレイメント・サービス HAPS



# 『ここ そこ あそこ』図録

2016年10月15日

## 執筆者

木暮愛季 小川理沙 巖茱悠 大西このみ 國米翼 伊智万莉奈  
Samuel Blazy 山田埜 Ninon GOUTELLE 松本泰章 岩崎陽子

## 監修

岩崎陽子

## 編集・表紙デザイン

巖茱悠 伊智万莉奈

## 発行

京都嵯峨芸術大学 味と匂い研究会 Perfume Art Project  
〒616-8362 京都市右京区嵯峨五島町1番地  
075-864-7858